ずに話を変えられた。
「私はお前に必要な物があれば手配すると言ったはずだ」
「はあ……」
もとより楽しげな様子を見せる事の殆ど無い男だが、それにしても不機嫌なように見えた。しかし理由は解らない。
「どうせここから帰った後は寝るだけだろう」
「だいたい疲れて寝ちゃうけど、それが何か？」
「寝るだけの家にわざわざ辞書や参考書のような重い物を持ち帰ってまた持ってくるなど効率が悪いだろう」
（もしかして、それで本棚を？）
「でも辞書は学校でも使うから」
それは事実であったが、他の本を置いていかなかったのはこの部屋は自分の物ではないとういう他人行儀な気持ちがあったからだ。
「ならばここで使う専用の物を用意してやる。必要な物の書名を書きだしておけ」
「あ、あの……何も、そこまでしてもらわなくても……」
「スピーカーは不要か？」
「え？」
「いつも音楽を聴いているようだが」
意外に感じてヒビキはヤマトを見つめる。
（俺の事、ちゃんと見てたんだな）
こまめに訪れてヒビキとビャッコの様子について確認はするものの、これまで一度も個人的な事に触れてはこなかった。ヒビキが持ち歩いているヘッドホンはパーカーに内蔵できる特殊な形で、言わなければ音楽を聴いていると気づかない者も多い。ヤマトが知っているとは思わなかった。
「ヘッドホンで聴くのが好きだからスピーカーは要らないよ」
遠慮もあったが半分は本音だった。自宅でも大音量で音楽を聴いたりする事は滅多にない。
「そうか」
淡々とヤマトが頷く。
「だけど、充電器があると嬉しいかな。時々途中で充電が切れちゃう事があるんだ」
「明日までに用意させよう」
不機嫌そうな表情を変えずに答えたヤマトの声色がほんの少しだけ柔らかいものに聞こえたのは気のせいだろうか。
「私は能力のある者には相応の待遇でもって臨むつもりでいる。これからも遠慮はするな」
頷きはしたけれど、自分の《能力》をまだ自覚してい